

創世ホール通信 No. 280

催し案内 + 文化ジャーナル
2018年5月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎



北島トラディショナル・ナイト・スペシャル ジョン・ジョン・フェスティバル・ライブ

5月2日(水) 19時～

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●前売2000円(当日2500円)

出演●John John Festival(ジョン・ジョン・フェスティバル)

john(大久保真奈 フィドル、ヴォーカル)

annie(ギター、ヴォーカル)

トシバウロン(本岡トシ バウロン、パーカッション)

主催●北島トラディショナル・ナイト実行委員会(小西☎080・6386・2946)

■アイルランドやスコットランドの音楽を演奏する3人組が登場。美しいケルト文化圏の伝統音楽をご堪能ください。

■フィドルのJohn(大久保真奈)は、2010年10月に坂上真清氏率いるハンドリオンのメンバーとして創世ホール登場歴あり。日本屈指の美少女フィドラーとして知られる(実際は一児の母!) ■トシバウロンは、東京のトラッド・シーンの仕掛け人として有名な存在。

創世ホール名画観賞会 28 ふたりの桃源郷

5月19日(土) 2回上映

①10時半～ ②14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●大学生・一般/前売1000円(当日1300円)、小・中・高
当日のみ700円、シニア(60歳以上)当日のみ1000円

作品●「ふたりの桃源郷」(2016年、日本、97分) ナレ
ーション=吉岡秀隆 監督=佐々木聰 製作著作=山口放送

主催●創世ホール名画鑑賞会実行委員会(☎088・698・1100)

■心は山にありました。最後まで山で/最後までふたりで/ある夫婦と支える家族、25年を記録したドキュメンタリー映画 ■夫婦とは、家族とは? 生きることの原点がここにある ■山口県のローカル放送局・山口放送が、ある夫婦と彼らを支える家族の姿を足掛け25年間にわたり追いかけたドキュメンタリー ■誰もが自分や家族に重ねずにはいられない、感涙必至のドキュメント。2016年『キネマ旬報』文化映画ベストワン作品! ■多数、ご参集下さい。

海野十三忌2018★湯浅篤志講演会 海野十三・森下雨村・小栗虫太郎

5月20日(日) 14時～16時

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

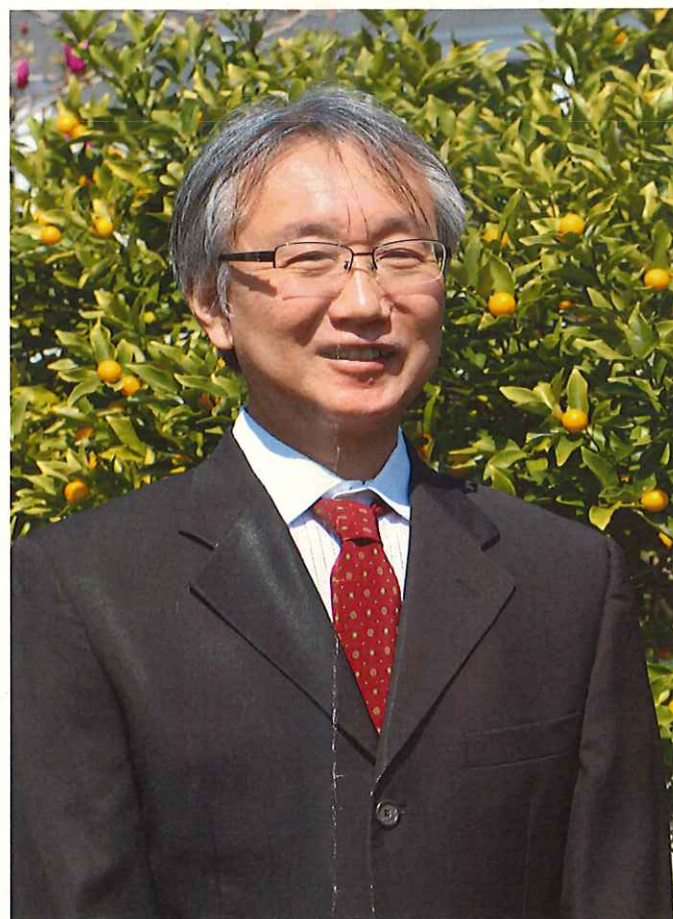
講師●湯浅篤志(『新青年』研究会)

演題●「海野十三と『シュピオ』をめぐる作家たち～
小栗虫太郎、木々高太郎、そして森下雨村」

主催●海野十三の会(小西☎080・6386・2946)

■徳島が生んだ日本SFの父・海野十三(うんの・じゅ
うぎ)を顕彰する文学講演会。

■今年は、海野が友人の探偵作家・木々高太郎、小栗虫
太郎と心血を注いだ伝説の探偵雑誌『シュピオ』(1937
-1938)にスポットを当てる。



坂田明グループ(梵人譚) ライブ・イン・徳島

6月15日(金) 19時～

会場●3階多目的ホール

入場料●前売/大学生・一般3000円、小中高2000円(当日各500
円増)

出演●坂田明グループ(梵人譚=ばんじんたん/坂
田明 [サクソ、クラリネット、ヴォイス]、ジョヴァン
ニ・ディ・ドメニコ [ピアノ]、山本達久 [ドラムス]、
ジム・オルーク [ベース])

演奏予定曲●「ハタハタ」「ひまわり」ほか

主催●坂田明グループ(梵人譚)◎ライブ・イン北島実行委員会(☎088・698・
1100)

■日本を代表する天才的サクソ奏者・坂田明が超一流のメン
バーを率いて、2年ぶり、6度目の北島町公演を敢行。今回も
東北鎮魂の壮絶な名曲「ハタハタ」やチェルノブイリを連帯す
る「ひまわり」を演奏します。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

故郷は地球

～脚本家・佐々木守がめざしたもの①

石川県立図書館・池田憲章

●●●今号から、《創世ホール・アーカイヴズ》の一環として、2007年2月25日にS F特撮研究家の池田憲章(いけだ・のりあき)さんが創世ホールで行なった講演会「故郷は地球～脚本家・佐々木守がめざしたもの」の採録を連載します。この講演会は10年以上経過した今でも県外から資料請求の問い合わせがあるなど、伝説の催しとなっています。私たちは、この講演採録が、将来、映像や脚本の世界の研究者や愛好家にとって重要文献の一つになる資料的価値の高い内容をもつものであることを確信しています。(小西昌幸) ●●●

講師紹介 ●北島町立図書館・創世ホール館長の小西昌幸です。講師先生のご紹介をさせていただきます。ご本人の経歴は印刷物にありますので、ここでは、今日の催しの企画段階から実現に至るまでのエピソードをご紹介します ●講師である池田先生は、以前から北島町創世ホールの講演会シリーズに注目をされておりまして、ぜひこれまでの歴代講演記録をまとめて本にしたらいのではないかとわかってきました。そしてもう2年近く前になるでしょうか、「テレビドラマの世界は取り上げていないようだから、佐々木守さんを招いて講演してもらったらよいのではないか。もしその気があるなら、話は通してもよいですよ」といわれました ●その年度の講演会は既に進行していたので、テレビドラマと佐々木さんの催しは平成18年度になるだろうと思って私達はそのつもりでおりました。そんな矢先、昨年2月の末、佐々木守さんのご逝去が報じられました。私も池田さんも大ショックを受けました。もちろん佐々木さんにはまだ接触はしていませんでしたから、佐々木さんサイドは全くあずかり知らぬことでしたが、とにかく、私達は呆然といたしました。池田先生と何度か代わりの講師について相談しました。池田先生は、佐々木さんと同世代の演出家やプロデューサーなどでどうだろうかと提案されたこともあったのですが、私は「池田さん、あなたが講師をやってくれ、あなたも僕ももう50歳になった。これは、佐々木さんのドラマに人生の深い部分で影響を受けた僕たちの方で、やろうではないか、恩返しのもつりでやろうではないか」と、話しました。こうして池田先生でやることが決まったわけです。池田先生は今日のために、新たな取材を多くしてこられました。これは大変なことです。今週だけでも数名の方に取材されています ●実は一昨日、佐々木守さんのご出身地の石川県能美市の寺井図書館の方からご連絡をいただきました。なぜ徳島でこんなことが実現したのかと驚かれているようでしたから、私が先ほど話したようなことをお伝えすると、絶句されていました。そして、今日の講演会にお越しの皆さんへのメッセージをいただきました。ご当地では佐々木守さんの蔵書が寄贈されたことを契機に既存の建物を利用した形で佐々木さんの記念館あるいは資料室のようなものを作る構想がある、来場者の皆さんに熱い連帯の気持ちをお送りしたい、ということでございました ●本日は後ほど、池田先生のサイン会もごさいます。それでは池田先生、よろしくお願ひいたします。(2007年2月25日) *肩書等は、2007年当時のものです。

講演 ■どうも、小西さんありがとうございます。実は、今日どういいうお話をしようかということ、ここ2週間ほど色々考えて考え抜いてきました。僕は1979年に、朝日ソノラマから出ておりますファンタスティック・コレクション(『ウルトラQ&怪奇大作戦』)の、これはもう絶版ですけど、24歳の時にこの本の取材で実相寺昭雄(じっそうじ・あきお)さんに会いに出かけました。そこで色々なお話をお聞きしました。

■実相寺さんは佐々木さんと名コンビとうたわれていたディレクターですけども、事務所をお訪ねして、僕は待っていました。実相寺さんは、3メートルくらい離れたところでスタッフの方と映画の打ち合わせをされていたんですね。24歳の僕は待っていたんですけど、打ち合わせが終わって実相寺さんが90度顔をこちらに向けて、「君、取材に来た人？」というから

「ええ、そうです」と答えると、「自分の作品のことだったら一切お話しできない。映画監督が、自分の作品の解説をペラペラ話すなんてとんでもないことだ。おしまい」と言われまして(笑い)、びっくりしました。

■ただ、今日もお話しする佐々木さんがシナリオを書かれた「ウルトラマン」のジャミラが出てくる「故郷は地球」だとかですね、「怪奇大作戦」の「京都買います」が僕は、大好きだったものですから、「あの岸田森さんの演出をした監督が目前にいるのに、帰れるか」と思いましてですね、「それではいつも一緒にお仕事をされているシナリオの佐々木守さんとか石堂淑朗(いしどう・しろう)さんとか、あるいは役者の寺田農(てらだ・みのり)さん、岸田森さんたちのお話しならどうでしょうか」と、いいましたら「そういう話ならいいよ」ということで、そのあと、1時間半ほど作品の色々なお話を聞かせていただきました。

■そして1984年に、この図書館にも収蔵されていますこの『ウルトラマン・怪獣墓場』という佐々木守さんのシナリオ集を大和書房が出版するそのときに、当時の編集担当だった青木さんから「この方は今は筑摩書房の編集部長になられている人ですが一佐々木守さんと実相寺昭雄さんに対談してもらいだけでも、古いお付き合いだから、お友達話で終わってしまうかもしれない。だから読者の代わりに池田君質問してくれよ、と依頼されまして、僕は、佐々木守さんに会えるのか、しめしめと思っていると、僕は単に聞き役になればいいのかと考えて座っていたんですが、佐々木さんがやってくると、非常に目つきの厳しい、もう殺気を感じさせる方で、僕が質問をふると「それについて、池田さんはどう思われるのですか」と、傍観者であることを許されない、それで僕が色々話をして、あきれられたり、「へー」とかいわれたり、それで笑われたり、実相寺さんと僕が「なるほどねー」なんていうことになりました。20代から30代になりかかる頃に、佐々木守・実相寺昭雄といった方とお会いできて、作品だけでは分からない話をお聞きしたものですから、変に作るよりは、お二人に聞いたことと、お二人と一緒に仕事をされてきたスタッフの方や、佐々木さんの奥さんにお聞きしたことを、お話しした方が、皆さんの興味も倍加するのではないかと思います、資料はもちろん調べてまいりました。

■ここ2週間の間に、佐々木守さんの奥様の佐々木直子さん、数々の作品「怪奇大作戦」「コメットさん」「柔道一直線」でコンビを組んでいたTBSの橋本洋二プロデューサー、今、テレビマンユニオンの副会長で、かつて「七人の刑事」の演出をされた今野勉(こんの・つとむ)さんとか、あるいは、「怪奇大作戦」の「京都買います」の美術監督であり、ATGの「無常」とか「曼荼羅」の美術監督でもある池谷仙克(いけや・のりよし)さん、この方は「シルバー仮面」のデザイナーでもありますけど、あと「柔道一直線」「秘密戦隊ゴレンジャー」、最近では「ウルトラマンマックス」なんかも書いたシナリオ・ライターの上原正三さんなどの取材をあわただしくしてきたものですから、その話題を少し織り込んでお話ししたいと思います。

■奇しくも今日2月25日に沖縄では、全く同じ時間に上原正三さんと「ウルトラマン」の飯島敏宏監督とフジアキコ隊員役の桜井浩子さんが、今、金城哲夫さんをしのぶシンポジウムを開いている最中なんですね。上原さんにお話ししたら、「えっ、佐々木さんを徳島でやるのかー、なんだか太平洋の南に向けた方にはにぎやかだねー」なんておっしゃっていましたがそれでも(笑い)、これも佐々木さんや金城さんが作った作品がいまだに忘れられない、人の胸に訴える部分があるためだと思いますので、そういうお話をしようと思います。

■佐々木守さんは、1936年(昭和11年)に石川県の村全体が60戸という小

さな集落でお生まれになったんですね。戦争中は当然軍事教育で、絵の時間だというと、「兵隊さん、ありがとう」とか、ゼロ戦の絵を描いたりして過ごしていて、それで終戦を迎えるわけですが、佐々木さんには実は、ひとつの大きな楽しみがあったんですね。それは、NHKラジオで放送されていた「こどものじかん」という、夕方の子ども向けの、ドラマや歌など色々な要素のある番組が昭和13年頃からあったんですね。

■その中に、徳島で生まれた《日本SFの父》といわれる作家の海野十三(うんの・じゅうざ)が原作を書いた「成層圏戦隊」という作品も昭和19年に放送されておりまして、これは『海野十三全集』にも入っております「宇宙戦隊」を原作にした作品で、金属生命の宇宙人が第二次世界大戦進行中の地球に攻撃をかけてくる、という物語です。日本の軍隊が成層圏飛行を研究していると、はるか上空を移動している飛行物体を発見する。これは円盤なわけですけども、その円盤がですね、実は、透明な円盤で姿が見えない。

■なんで姿が見えないのかというと、超高速振動一非常に高速で振動することによって、姿が見えなくなるという現象一で円盤が見えないのだということ、海野さんが書いています。例えば、手をこらやって速く動かすと、ぶれて見えにくくなる、という現象と同じですけど、円盤が見えない。こういう現象を帆村莊六(ほむら・そうろく)という科学探偵が暴いて、正体が判明するわけです。実は佐々木守さんは、それを「ウルトラマン」の人間が変身したジャミラが出てくる「故郷は地球」でお使いになった。「故郷は地球」の宇宙人の円盤が透明円盤なんですけど、やはり超高速振動によって姿を隠しているわけです。自分が子ども時代に夢中になって聞いていたラジオドラマへのある種の畏敬を込めて、アイデアを借りて、この作品に織り込んでいたわけですね。この「こどもの時間」は、戦後になると「鐘の鳴る丘」とかあるいは、「新諸国物語」～「紅孔雀」「笛吹童子」などに引き継がれて、さらに子どもたちの血を湧かせるわけです。

■戦争が終わって、今度は一気に自由教育の、アメリカが持ち込んだ民主主義教育を小学校で実践しようという形で、全く新しい教育形態になるわけですね。佐々木さんも書かれています、いきなり教壇が無くなってですね、先生と子どもたちは視線が同じ高さになると。学校も自主運営しなければいけないと。生徒会は選挙で委員を選んで、みんなで考えてやっていこう、何か問題が起こったときには、みんなで意見を出し合おうと。先生は教室の後ろに立って、子どもたちの意見が出揃ったところで、「先生はこう思うんだけど、みんなはどう思うだろう」と、そういう形で、佐々木さんにとっては目が覚めるような、常に自分はどう思っているのかということ、を求められたわけです。

■全く戦前と違うものですから、非常に佐々木さんはそこに、なにが新しい生きがいのようなものを見つけて、さらにこういう物語が好き少年ですから、戦後続々と復刊されていく高垣眸(たかがき・ひとみ)さんの『快傑黒頭巾』とか、あるいは南洋一郎さんの『吼える密林』『緑の無人島』だとか、波瀾万丈の物語に夢中になっていくわけですね。

■あるいは江戸川乱歩の『怪人二十面相』とか。戦前は、どの子もなかなか本が買えたわけではありませんでしたから、そういうものに出会って、戦後の続々と発刊される子ども雑誌の中でですね、例えば、小松崎茂さんの『地球SOS』、福島鉄次さんの『沙漠の魔王』～ランプをこすると巨大な魔神が現われて、それが飛行機と戦ったり、戦車をやっつけたりという空想科学絵物語なんですけど、そういうものを目を輝かせて読む内に、佐々木さんは、児童文学、子どもの読むものって凄いな、だんだん児童文学の世界に傾斜してゆく形になるわけです。(次号に続く)